

# 自律学習支援のための学習者コミュニティの構築

著者名(日)	佐々木 緑
雑誌名	教育総合研究叢書
巻	3
ページ	97-107
発行年	2010-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1084/00000081/">http://id.nii.ac.jp/1084/00000081/</a>

# 自律学習支援のための学習者コミュニティの構築

## Creating a Community of Learners to Foster Students' Autonomy

佐々木 緑\*

Midori SASAKI

### 抄 録

自律学習の重要性が唱えられ中、多くの大学で学生を自律学習者へと導く試みが行われている。学習法や学習計画の立案と見直しの重要性を解く講座や演習であったり、学生が自主的に利用できる学習施設などの提供である場合が多い。しかしながら、十分な学力および学習習慣が身についておらず、かつ自律学習指導を受けていないような学生が入学してくる大学の現状では、個々のプログラムを散発的に提供するだけでは、真の意味での自律学習者を養成することは難しい。複数のプログラムや取り組みを体系的に組み立てる必要があり、また、学習者が互いに学び合いながら、学習に対する動機付けや学習動機が継続的に強化されるような環境作りも必要である。本稿は、関西国際大学教育学部英語教育学科における自律学習促進の取り組みとその効果について報告し、体系的な自律学習支援のモデルを提供することを目的としている。

### 1. はじめに

学力低下、学習意欲低下が問題視される大学生を、自らの学びに責任を持って自主的に学べる自律学習者に導くための取り組みの重要性が叫ばれる中、大学教育も変貌を遂げつつある。従来の教員中心方の講義形式中心の授業から、学習者参加型のアクティブラーニングの手法などを取り入れた教育手法の改革や、初年次教育における学習法指導の徹底、学習者の動機付けを重要視する体験型学習の充実等、様々な新しい取り組みが行われてきている。また、自律学習を支えるための学習支援センター、外国語学習センター(Self-Access Language Center)などの施設を提供する大学も増えてきている。

自律学習とは、単なる自習ではなく、学習者の内面からの主体性による能動的学習態度であり、学習者自身が自らの学びに責任を持ち授業および授業外の学びの機会を積極的に利用しながら、学びを深めていくことである。青木(1996)は、自律学習を「自分自身のために、自らの知識(とスキル)を構築しようとして、仲間や教師やその他のリソースと協力し、交渉しつ

---

\* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

つ行う学習を、自分自身の手で管理すること」と定義している。この意味における真の自律学習者を養成するためには、先述のような学習支援施設を提供するだけでは不十分である。これまで自律学習を経験しておらずかつ学習に対する意識も高くない学生達に、単に自律学習支援の施設を提供するだけでは、その支援を享受し成功する学生は、一部の学生に限られてしまう。十分な学習準備が出来ていない学生に、自律学習の重要性を理解させ、自ら様々なリソースを利用できるようになる指導をするためには、学生の意識、学習姿勢を改革させるためのより体系的な取り組みが重要であり、教育手法の見直しも必要である。

英語教育においては、1980年代後半に注目されはじめたコミュニケーションアプローチ(Krashen, 1988)の教育理念の普及に伴い、それまで伝統的に行われていた「文法・訳読」から、「コミュニケーション能力の養成」授業への転換の有効性が唱えられるようになった。この転換は、単なる授業目標の変更以上のことを意味している。「コミュニケーションアプローチ」では、それまでの文法知識を教える教育から脱却し、学習者が実際の英語使用を通して、英語運用能力を身につけていける教育を行うことを目指しており、従来の「教員中心型」から「学習者中心型」の授業法への転換が求められる。つまり、「教員が教える」ことに重点を置くのではなく、「学生が学ぶ」ことに重点を置き、教員は学生が効果的に学べる仕組みを考え、必要なサポートを提供するファシリテーターとしても役割を果たすのである。この教授法においては、学習の責任を教員と学習者が共有することが必要になり、「学生中心型」の授業で十分な成果を上げるためには、学習者への動機付け、自律学習の促進なども、大変重要な要素となる。

関西国際大学教育学部英語教育学科でもこの教育手法の転換を一つの柱として2008年度にカリキュラムの改定を行い、同時に「自律学習の促進」に取り組んだ。本稿では、同校の取り組みとその効果についてまとめ、カリキュラム外のプログラムおよびカリキュラムと連携した形での体系的な自律学習支援のモデルを提唱することを目的とする。

## 2. 関西国際大学教育学部英語教育学科の取り組み

### 2.1 カリキュラムの改訂と教育手法の改定

2008年度のカリキュラム改訂では、第一に国際社会で通用する英語運用能力の養成、そして就職に役立つ専門知識（英語教育、観光、ビジネスのいずれかの分野）と実践力のある人材を養成できるカリキュラム構築を目指した。本稿では特に「国際社会で英語運用能力の養成」のための取り組みについて述べていく。学習習慣の定着していない学生を自律学習者へと導き、英語学習を成功させるためには、学生中心型の教育手法の徹底、厳格な学習管理と学習者を支援するサポート体制の充実が必要であるという考えのもとに、以下のことに取り組みを実施することとした。

#### 1) English Only Policy（学科教育に関して英語のみを使用言語とする）導入

授業内だけでなく、授業外でも日常的に英語のみを使用することで、EFL環境における英語運用の機会の確保を目的とする。

## 2) 厳格なレベル分けによる到達目標の管理

到達目標を明確にし、学生自身が自分の到達目標を常に意識できるよう、最終到達目標をクラス名とした習熟度によるレベル分けを行う。それぞれが受講する科目は学期毎に行うプレースメントテスト(TOEFL ITP を利用)の結果で決める。これによって、学生、教員共に、学習目標の設定と到達度の確認を常に意識することができる。

## 3) 「学生中心型」教育の実施

「学習者中心型」の教育手法を採り、学習者と教員が同等に学習成果に対して責任を負うことを、学習者と教員が共に理解した授業運営を行う。学生が授業の到達目標を達成できるようにファシリテーターとして授業を計画し運営をすること、また学生が自らの学びに責任を持つ自律学習者となれるように指導を行うことが教員の責務である。学生側は積極的な態度で授業に参加することが求められる。

## 4) 宿題の義務化と Homework Ticket (宿題チケット) 制度

基本的には全ての授業で宿題を課す。十分な準備をして授業に望みが学生の義務であり、宿題をしていない学生は授業に参加することができない。Homework Ticket を渡され、専任教員のオフィスアワーあるいは後述のイングリッシュラウンジで、参加できなかった授業を補う授業外学習を行う。学習習慣の身につけていない学生は最初戸惑うが、学習習慣を身につけ自らの学習に責任を持てるようになるための重要な取り組みである。

## 5) 協働学習の奨励と支援

授業および授業外の課題(宿題)には、可能な限りペア、グループワークを用い、ともに学び会える機会を多く与える。また上級生や教員が宿題や授業外での自主的な学習を支援する体制を整える。詳細については次節 2.2, 2.3 に示す。

## 6) 教員集団(専任および非常勤教員)の教育目標、教育手法の共有と徹底

各授業の到達目標を示したカリキュラムマップを作成し、全ての教員に配布し、ガイダンス等で徹底する。年に 2, 3 回ワークショップ形式での講師会を実施し、授業運営上の問題点、効果的な授業活動、授業運営法などについてのトレーニングを行う。また学期中には授業参観も行い、学科が目指す教育手法および教育目的の徹底を図る。

## 2.2 イングリッシュラウンジでの自律学習支援

2008 年度にプログラムの試験運用を始め(佐々木, 2009), 2009 年度よりイングリッシュラウンジ室を開室し、英語自律学習支援活動を始めた。関西国際大学のイングリッシュラウンジ活動は、多くの外国語教育施設に見られる学生が自ら進んで利用する Self-access 型の外国語学習支援活動とは、若干異なった特徴を持っている。多くの場合このような施設は、学生の自律学習を支えるものであり、学生の自主的な利用を基盤としている。参加を強制するような活動は行われないのが普通である。しかしながら、学習習慣が十分身につけていない学生を自

律学習者に導いていくためには、単に施設を開室し利用を呼びかけるだけでは不十分である。自律学習の重要性を理解させ、自らの学習に責任を持ち、自主的に学習に取り組める学生を育てるための体系的な取り組みが必要である。

関西国際大学のイングリッシュラウンジでは、強制的に参加させるプログラムと自主参加のプログラムを組み合わせることで、学生の自主的な学習を促進させることに取り組んでいる。自由参加にしておけば利用しない学生層にも、授業と連動させたプログラムに参加を強制することで、イングリッシュラウンジを利用することの有効性を理解させることを第一目標としている。当然、内的な動機付けをするためには、強制するだけではなく、楽しく学べる環境作りも必要である。強制されて参加してみると、楽しくかつ有効であるプログラムが提供されていることに気付き、その気付きがその後の自由意志での参加につながっていくようなプログラムの提供を目指している。2009年度に実施した同室での主な取り組みは以下の通りである。

#### 1) 授業と連動した学生によるプログラム

ランチタイムプレゼンテーションとして、授業および学科行事の成果発表を行う。授業とはことなり、昼食を取りながらリラックスした形での発表と質疑応答を経験する。学年の違う学生、教員も参加し、楽しい雰囲気の中で英語での発表をし、参加している教員および学生との交流を深める。1年生の入学直後のフレッシュマンキャンプのプログラムとして実施した内容の発表、2年生のポスタープレゼンテーション、教職課程履修者による簡単な英語学習法指導、ディベートクラスの発表などが、その例である。いずれの場合も授業活動の延長としてほぼ強制的に参加させるものである。

#### 2) 授業資料の保管と学習支援

全ての英語科目について、授業で使用した資料および宿題の記録をイングリッシュラウンジに保管し、授業支援に利用する。授業を欠席した場合は自らの責任において学習を補完するルールとして徹底し、イングリッシュラウンジに在室する教員および学生スタッフ（イングリッシュラウンジリーダー）が、支援を行っている。前述の通り義務化されている宿題のサポートも行う。

#### 3) 自主学習教材の提供と学習サポート

自主教材を提供し、教員およびイングリッシュラウンジリーダーの指導が受けられる体制を取り、自主的な学習の支援を行う。また宿題としてイングリッシュラウンジの教材の利用させることもある。上級生および卒業生（英語教育関連大学院進学者）がイングリッシュラウンジリーダーとして学生の指導に当たることで、良い先輩のモデルに刺激を受け、自主学習を進めている学生も多い。

#### 4) 教員によるプログラム

専任教員は、TOEFL 準備、リスニング、リーディング等、学生の英語学習を支援するための授業外のプログラムを実施。また、専任および非常勤講師によるランチタイムプレゼンテーションを行い、英語学習法、国際経験等をテーマとし、学生の英語教学習

への関心を高めるような内容でのプレゼンテーションを実施している。このように非常勤講師にも授業外の活動に参加してもらうことで、単に授業を担当するだけでなく、学生の学習を支える教員集団として、学習者コミュニティの一員として参画するという意識を高め、教育効果を上げることを目指した活動である。

#### 5) フリーディスカッション、英語ドラマ、映画鑑賞など学生主導型のプロジェクト

学生達が自らトピックを選び、記事を持ち寄って行うディスカッションや英語ドラマや映画の鑑賞など、学生が自分たちで企画するプロジェクトの実施。始まりは教員が声をかける形であるが、学生が主体的に企画し実行したプログラムである。

## 2.3 学習者コミュニティの構築

2.1 および 2.2 に示したような厳格な授業・学習管理とそれを支援する体制だけでは、学生の内的な学習への動機を継続的に刺激し強化するには不十分である。共に学ぶ仲間そしてそれを支える教員が一つの学習者コミュニティを構成し、互いの学びを支え合う環境作りこそが学習意欲を高め、自律学習者成へと導くという仮定の下に、教員、上級生下級生の垣根を越えた学生達が1つの学習者コミュニティの構築を目指す取り組みを行っている。以下にそのプログラム内容を示す。

#### 1) フレッシュマンウィーク・キャンプ

大学での学習へのスムーズな導入を図る目的で、入学直後に大学が行うフレッシュマンウィークの後授業が始まる前に3泊4日のフレッシュマンキャンプを実施している。フレッシュマンウィークは大学生活への導入のためのガイダンスが中心であり、フレッシュマンキャンプは英語教育学科の授業スタイルになれるための準備を行うことが目的である。前述の通り英語教育学科の授業は英語のみ、学生中心の授業法、宿題の義務化と宿題チケットシステムなど、大学入学までの学習スタイルとは大きく異なることになる。この急激な変化に対応できるように、ガイダンス形式で説明するのはなく、楽しみながら参加できる様々なグループワークを通して、学科の教育手法を体得できるようなプログラムが組まれている。キャンプには上級生や学生メンター（後述）、非常勤講師を含む全ての教員も参加し、クラスメートだけでなく、学年を超えた人間関係作りを始める。図1（次頁）に2009年度のフレッシュマンキャンプ実施後のアンケート調査の結果を示す。学習コミュニティ構築の第1歩となる、効果的なプログラムであったことが分かる。

#### 2) 1年生と学生メンター

関西国際大学には2年生の学生から数名が学生メンターとして、1年生の大学生活への適応をサポートするというシステムがある。学生メンターはフレッシュマンウィーク、フレッシュマンキャンプ、および1年生の春学期のゼミに参加し、学生リーダーとして新入生のサポートを行う。学生メンターと新入生のつながりは深く、そのつながりをき



### 3) Multiply の利用

英語教育学科では学科の学生全員が1つの大きな学習者コミュニティに属し、互いの学びを支え合える環境作りを目指しているが、実際に大学で会い交流できる相手はどうしても限られてしまう。そこで、オンラインの Multiply というネットワーキングシステムを利用し、学生達がブログ形式で情報を交換できるようにしている。1年次に全員 Multiply に登録し最初はゼミの宿題として強制的に個人の HP をさせるが、その後クラスメート、上級生、下級生、教員等とのオンラインでの交流を通して、自主的に利用を続ける学生が多い。また交換留学等で海外にいる学生からの情報発信や上級生からの情報発信は、下級生にとっては自分の学習目標を設定する良い刺激となっている。

### 4) 学科行事での学生の交流

レシテーションコンテスト、スピーチコンテスト、ポスタープレゼンテーション、卒業研究プロジェクト発表など、学科で行う行事では、該当の学年やクラスのみでなく下級生、上級生も必ず参加させ、下級生と上級生の接点を増やすようにしている。互いに良い刺激を受け合える機会となっている。前述 (2.2) のイングリッシュラウンジリーダーによる下級生の指導も、同じ学習者コミュニティ内での交流を促進するものである。

## 3. 取り組みの成果

自律学習を定量的に図ることは難しいが、上記のような取り組みの成果であると思われる肯定的な学習態度について、2008 年度のカリキュラム改変以前述べていく。

### 1) グループ学習の定着

授業の空き時間にイングリッシュラウンジ、図書館、空き教室を利用してグループで学習をする姿が常に見られるようになった。クラスメートと一緒に宿題をするだけでなく、イングリッシュラウンジ等を利用して、上級生に質問しながら宿題をする姿は 2008 年度以前にはほとんど見られなかったが、助け合いながら学ぶ姿勢は定着してきたようである。2009 年度には大学院留学準備の為の GRE 学習サークル、英語スピーキングサークル、TOEFL 準備学習サークルなど、イングリッシュラウンジ等を利用して自主的に学習をする学生のグループが、学生主体で立ち上がったことも、自律学習が進んでいることを示している。

### 2) メンター志望者の増加

2006 年度にメンター制度を導入してからのメンター希望者の数と実際の従事者数の推移を表 1 に示す。



表 1. 年度別メンター希望者数 (名)

実施年度	2006 年	2007 年	2008 年	2009 年	2010 年
メンター希望者	0	2	4	10	16
メンター従事者	3	4	6	10	未定

改訂後のカリキュラムで初年次教育を経験した 2008 年度学生が 2 年生として学生メンターとなる 2009 年度から希望者数が急増していることが分かる。各学年に在学している学生数が 35-45 名程度であり、2009 年度には約 30%、2010 年度は約 40%の学生が学生メンターになり、後輩の支援をすることを望んでいる。制度を始めた当初は必要人数が集まらず、教員が適切な人材を探し依頼する形であったが、学習者コミュニティの重要性を強調するようになってからは、互いの学習を支え合うコミュニティの一員として貢献しながら、自らの学びにつなげていこうとする積極的な姿勢が見られるようになった。

### 3) 英語を使用するクラブ活動の発足

カリキュラム改変前には英語で活動をするクラブは学内には存在せず、授業外で英語を使う機会は限られていたが、自ら積極的に英語使用の場を作ろうとする動きは見られなかった。しかし、カリキュラム改変後には、英語を使って活動をしようとする学生のクラブが発足し始めた。2008 年には英語ドラマクラブ、2009 年には ECC(English Communication Club) がその例であるが、いずれも学内での活動だけにとどまらず、学外の団体や他大学の学生との英語での交流も活動の一部であり、教室外のリソースを利用して、自らの学びの場を広げようとする自律学習への意識の高揚が、学生達のこのような動きにつながっているといえる。

### 4) 交換留学希望者の増加

表 2 は交換留学生として海外留学を経験した学生の数である。カリキュラムを改訂した 2008 年度入学生は在籍者の 33.3%が交換留学を経験していることになる。大学の交換留学プログラムが充実してきていることもあるが、到達目標を設定し交換留学生に向けて自らの学習計画を実行できるようになった学生が増えてきていると言える。

表 2. 年度別交換留学者数 (名)

入学年度	2006 年	2007 年	2008 年
交換留学経験者	2	2	11

### 5) 非常勤講師の積極的な参画

カリキュラム、教育手法改編とともに、非常勤講師にもイングリッシュラウンジ、フレッシュマンキャンプへの参加等授業外サポートへの協力を依頼した。イングリッシュラウンジでの指導に関しては報酬も出ない形での依頼であるにもかかわらず、多くの非

常勤講師が昼休み等の時間にイングリッシュラウンジで学生との交流の時間を取ってくれるようになった。また、自らが勤務する他大学の学生との英語での交流を企画したり、前述の **Multiply**（学生のオンラインネットワーク）にも積極的に参加し、学生ブログにコメントを残してくれるようになった。学習者コミュニティの一員として学生指導に関わろうとする意識が芽生え始めているようである。また専任教員とともに学科の英語教育についての研究に従事し研究発表等にも参加する非常勤講師も増え、学科の教育に対する理解が深まり、学生指導に積極的に関わろうとする態度につながっている。年に2-3回程度行っている講師会においても、従来の一方的に授業の情報を受け取るという姿勢から、積極的にワークショップに参加し学科の教育を向上させようとする姿勢が見られるようになってきている。

#### 4 まとめ

本稿では関西国際大学英語教育学科が、自律学習者を養成する為にどのような取り組みをし、どのような成果を修めているかについて報告した。しかしながら、自律学習の成果を図る資料が少なく、十分な実証的データの分析に基づいた研究であるとは言えない。学生の成長と共にアンケート調査、学習成果、および学生の学びのふりかえりなどを十分分析し、学習者コミュニティの構築が自律学習の促進と支援に果たす役割と効果について、定量的・定性的に分析できる基準を設定することが今後の課題である。

「注」

- 
- <sup>i</sup> T50 クラス = TOEFL ITP（プレースメントテストとして実施）で 500 点以上を目指すクラス  
T45 クラス = TOEFL ITP（プレースメントテストとして実施）で 450 点以上を目指すクラス  
T40 クラス = TOEFL ITP（プレースメントテストとして実施）で 400 点以上を目指すクラス

「参考文献」

- Agota Scharle and Anita Szabo (2000) *Learner Autonomy*. Cambridge University Press
- 青木直子 (1996) "Autonomous Learning: What, why and how?", *ASTE Newsletter*, no. 35.
- Krashen, Stephen D. (1988) *Second Language Acquisition and Second Language Learning*.  
Prentice-Hall
- Phil Benson and Peter Voller (1997) *Autonomy and Independence in Language Learning*.  
Pearson Education
- 佐々木緑 (2009) 「イングリッシュラウンジ活動の有効性についてのパイロット研究」『教育  
総合研究所叢書』No 2
- Zoltan Dornyei (2001) *Teaching and Researching Motivation*. Pearson Education
- ゾルダン・ドルニェイ (2005) 『動機づけを高める英語指導ストラテジー 35』米山朝二他訳

## Abstract

Many researches and educators have pointed out the importance of self-directed learning and various programs and facilities to foster or support autonomous learning are provided at Japanese universities recently. Those are usually a series of lecture or practice of developing the skills or strategies to develop the autonomous learning. Many universities provide self-access learning facilities, too. However, just providing such programs or facilities is not enough especially for those students who haven't developed an effective learning habit or who have never experienced self-directed learning. To help those students, we need to plan well and integrate some programs and activities in the structure which can guide students to be autonomous learners. It is also essential to create a community of learners where students study together with the help of teachers and peer or senior students, get motivated and reinforce the motivation through the cooperative learning support from the community members. This paper introduces an example of the department of English Education at Kansai University of International Studies which has set up an model of a community of learners to foster students autonomy.